

NATO（北大西洋条約機構）によるユーゴスラビアへの空爆も早一ヶ月を過ぎようとしている。その「効果」をめぐって地上戦への準備が進められ、周辺諸国をも巻き込んだ泥沼化が懸念される。ミロシエビッチ大統領にしてみれば「コンボの軍事活動は武力で独立を勝ち取る」とするテロリストへの掃討作戦であり、他国が介入するなど

『福神』創刊号所載  
コラム 《《《 鷺峰の風 》》》

## 死者の人権について

鷺峰会 松戸道場  
町 行象

よけいなお世話だ」と言いたいところであろう。

またビノチエツト元チリ大統領の軍事独裁時代の拷問などの非人道的所業が断罪され、その身柄引き渡し問題の審査が英国において再開されることになった。いかなる国家元首といえども今や「国内で何をやる」と、国外からとやかく言われる筋合いはない」とうそぶいていられなくなったのである。両方とも大国の都合の良いときだけという前提だが、一応国際社会では「主権」より「人権」が優先されるようになったと言えるだろう。

にわか勉強のため消化不足で申し訳ないが少し「人権」について付き合っていたらきたい。

前述のように国際社会で「主権」より「人権」が優先されるようになった経緯を振り返ってみると、第一次世界大戦後設立された国際連盟では、人権問題は国内問題であるという主張が強

かった。しかし第二次世界大戦が勃発し、戦争の予防装置として機能できなかったその反省から、平和と人権問題は切り離せないという認識が国際社会に広まった。そして国際連合で仕切り直しとなり、戦後の国際的人権保障活動の拠り所として、1948年「世界人権宣言」が国連総会で採択された。ここに「人権」が「世界における自由、正義及び平和の基礎をなすもの」としてが国際社会に高らかにファンファーレよろしく掲げられたのである。

その人権も歴史的な社会構造の中で抑圧されてきた人々や人種・言語・文化・宗教や性の違いによつて差別されてきた人々、社会的弱者、児童、障害者……等範囲が広がり発展してきた。今や国際社会は「人権」「人権」の大合唱であり、「人権教」の信者も本宗に多いようだ。大変結構なことである。

また手元の『人権問題キーワード』に拠ると人権の歴史にも政治的市民的

な「第一世代の人権」経済的な「第二世代の人権」集団的な「第三世代の人権」があるという。

歴史的に「人権」がステータスアップしてきたのである。しかし「第三世代の人権」まではあくまでも生きている人間の人権拡大であったが、第四世代の人権として死者の人権が考えられな  
いであろうか。

国際紛争の原因はいろいろ考えられるが民族の歴史的怨念に由来することが多い。過去をいかに「精算」するか、二十一世紀に向けて人類共通の課題である。国家間の謝罪の問題や国境線策定作業も生者の外交レベルだけでなく、死者をも範疇に入れた解決策が講じなければならぬであろう。死者が納得しなければ紛争の火種は残り、それがいつ再燃するか解らない。歴史の示すところである。

インターネットに象徴されるように

今や情報は国境を越え、企業は多国化され経済も国境を越える。二十一世紀はあらゆる分野の境界が崩され、このような動きはますます加速化されるであろう。そして「人権」もユーゴ問題やビノチエツト元大統領問題のように今や国境を越える。やがては民族や宗教をも越えるのであるまいか。

そこで越えたついでにもう一つの境界、死者と生者の境―幽明界―をも越えさせたのが筆者の願いである。

とは言っても「人権」という言葉を何の抵抗もなく使いたいわけではない。国際社会で使われる場合政治的要素が強すぎる。中国のWTO（世界貿易機関）加盟に関してアメリカは外交カードとしてチラつかせながら支持を表明している。「市場原理」と共にアメリカの世界戦略の一翼を担っているからである。

さて昔は（どれ位昔と言われれば言葉に窮するが、とにかく昔）「死者の

人権」と言うより「死者の尊厳」で事足りたはずである。「来世」を信じ、死者は懇ろに弔われ、祀られていた。そして「死後の家族」として上原専祿流に言えば人々と「共存」し「共生」し、ある時は「共闘」していたのである。しかし現代においては浅薄な合理主義によって死後の存在は否定され、すべて生者中心に物事が考えられるようになった。そこで敢えて死者の尊厳を回復するために「人権」という言葉を用いるのである。

前置きが長くなったが今の人に「死者の人権」ということ「ナニソレ？」と言われるのがオチである。

現にある坊さんの集まりで話したら「死者にも人権があるの？」と目がテンになっていた。坊さんでさえそうなのだから況や一般の方においておやである。

しかし日頃先祖供養や様々な霊供養

に携わっているものとして、どうしても死後にも人権は存続し、死者にも人権はある、又なければならぬと思う事がしばしばある。

「横浜母子殺人事件」の時は亡くなられた被害者にも「プライバシー権」が有るんじゃないかと痛切に感じた。被害者の生前の生活ぶりが様々に憶測され、心無いマスコミによって興味本位に書かれ、ノゾキ見趣味に晒された。「当人」は勿論遺族・関係者はマスコミによる「二次災害」にもさぞかし心を痛め、怒りを覚えたことであろう。

「オウム真理教事件」「神戸・児童連続殺傷事件」など世間を震撼させた、一連の事件の時も、マスコミや当局の事件の扱い方に何か腑に落ちないものを感じたのは筆者だけではあるまい。単純に言えば被害者側と加害者側の「バランス」がとれていないのである。生きている加害者には更正の可能性の元に様々な対策が講じられ、また弁明

の機会が与えられる。それによって「罪」と「罰」或いは「命の値段」が天秤に掛けられ、目盛りは様々な論議のもとに左右(上下?)に揺れながら、結局は程良いバランスで留まり、判決となる。何もその事に異議を申し立てる訳ではないが、割に合わないのは亡くなった被害者である。「苦しみ」「悲しみ」「無念さ」「悔しさ」…を訴えることもできず、「お・も・い」だけが残る。

生きている人間を中心にすべて考えられ、死者の立場で考えようとする。死者の立場で考えるなんて所詮無理だとおっしゃるのなら、せめて「どんな思いで死んでいったのだろう」と言うぐらいは考えられるはずだ。「否。考えましたよ」と言うかも知れないが、一時的に考えることと、その事を持続して考え続けることは全く別のことだ。

私達は自己防衛的に異常な事件、そ

れも酸鼻極まりない事件に遭遇すると目を覆いたくなるし、たとえ見てもすぐ目をそらしたくなる。凝視し続ければならない。そして「解釈」したくなるのである。異常な「事件」を平常な日常の中で自分達なりに納得したい思いにかられる。そして「解釈」をはじめめる。

事件の背景は社会学的に、犯人の動機は心理学的に、それぞれの分野のいわゆる有識者のコメントを中心に解明される。そしてああいふ家庭環境に育ったからこうなったんだ、まんざら本人の所為だけではない、事件を生み出した社会も悪い。とか、様々な仮説によって犯人の異常な心理が分析され、犯人像が描かれる。そして事件は起こるべくして起こり、起こすべき人が起こした…となる。挙げ句の果てに人々は必ず「今度の事件を教訓として、二度とこういう事件を起こしてはならない」「それがせめてへの死者の慰めである・・・」で締めくくられる。

死者は生きている人に都合良く解釈されるために死んでいったのではない。

人々は自分達なりに納得すれば又新しい事件に興味は移り、時が経ち事件は風化し人々の記憶から忘れ去られる。

・・・そして亡くなった被害者の苦しみだけが取り残される。

オオーなんと！殺されることは割にあわないのだから。

そこでせめて死者の「人権」で死者の「おもい」を復活させたい。と言っても何もゾンビの如く蘇らせたいというのではない。あくまでも死者の苦しみを癒し、いつかは死者が自分の「死」を「納得」して「成仏」への道を歩んでもらいたいと思っからである。それは困難な道であるかもしれないが、死者の苦しみを深く思いやり、根気よく回向供養する事によって可能なのである。そして死者が法華経の広大なる世界に目覚め、久遠の本仏お釈迦さまの

愛子として蘇るのをひたすら祈るのである。

試みに簡単に「世界人権宣言」風に取り敢えず書いてみよう。

#### 死者の人権宣言

人類社会の構成員(特に強調したい)として生者と共に固有の尊厳及び平等かつ奪い得ない権利を認めることが世界における自由、正義及び平和の基礎をなすものであり、死者の人権の無視及び軽侮が、人類の良心を踏みじつた野蛮行為をもたらし、(略)

第一条「供養を受ける権利」すべての死者は子孫乃至有縁の人によって供養を受ける権利を有する

第二条「転生の権利」すべての死者は生まれ変わる権利を有する。

第三条「成仏する権利」すべての死者は最終的に成仏する権利を有する。

第四条「プライバシー権」生者と同じ権利を有する。

第五条「肖像権」これまた同じ。

第六条「環境権」祀られている場所の静謐さを要求する権利を有する。

第七条「臓器に対する所有権」生前の意志を履行させる権利を有する。十五歳未満で亡くなった場合たとえ家族であっても勝手に臓器提供に同意することはできない。

タネ切れです。後は読者も考えてみてください。

さて最後に人権侵害について述べたい。以上述べた条項に反することは当然であるが、一番の人権侵害は死後の世界を否定することであろう。その中でも最たる者は死後の世界を信じてもないのに、「引導」を渡す僧侶である。葬儀を儀礼的に習俗として考えマニュアル通りにやればそれで事足りると思っっている僧侶ではあるまいか。

# 「単なるお経?」「お釈迦になる～?」 —日常での不敬用語—

町 行象

風邪などを引いてしまいました。風邪は冬に引くものとはっかり思っていました。さにあらず夏にも引くものですね。

「冷房がいけなかったのかな」「疲れてたのかな」

はたまた「ひよっとすると結核かな。いや最近病院にも行ってないから移るわけはないし。そういえばこの間の隣の人、変な咳してたな。」

などといったん具合が悪くなると果てしなく妄想は拡がっていきます。

いろいろ反省してみたもののやはり加齢による免疫力の低下なのでしょう。か。「いやお経が足りない」とどっかから聞こえてきそうです。

ということ。反省材料には事欠かない日々を送っています。

さて『お経が足りない』と書きましたが、坊さんである私にとりましてはお経（勿論法華経ですが）は、今更申し上げるまでもなく生きていく上で絶対必要欠くべからざるものであります。

「生活」の基盤、「生命」の根元、過去を懺悔し現在を照らし未来を示す指針として我が人生に大きく君臨しております。

「お経（法華経）」に説かれているお釈迦さまの「みこころ」に触れ坊さんになって以来、お経を読み人様になら「お布施」を頂戴し、お経の意味や書いてあることを稚拙ながら人に説き、こうやって家族四人、今までどうにか生きてきたのはすべて「お経」のおかげと思っています。

そして生きてゆくための「お経」なのか？それとも「お経」のために生きるのか？

生活の手段としてのお経と生活の目的としてのお経のこの二律背反の問題の中に自己を投げ込んで、その緊張感の中で生きてゆくのがせめてもの、坊さんとしての「良心」だと思っています。

私だけでなく法華経を信じる者のみならず、すべての仏教徒にとっては「お

「経」は尊崇帰依すべきものであります。少し堅くなってきましたが、何故今更そんなことを言つのかとお思いでしょうが、実は読売新聞の社説で次のような記事を目にしたからです。

「問題は、民主党がこの政策を単なる「お経」に終わらせずに、実現させることができるかどうかだ。」

この文は「安保論議へ共通の基盤が見えた」というタイトルの下に書かれており、菅直人率いる民主党が安全保障基本政策の中で有事法制の整備を提唱したことに賛同する記事の一節です。民主党が政権担当能力のある野党として、単なる政策ではなく実行可能な法制化を目指す事を期待する文脈で使われています。

内容に関して云々する積もりはありませんが、この「お経」という言葉が使われ方が気に入りません。

「単なる「お経」？」

(ナニ「単なる」とは何事ジャー。と目くじらを立てたくありませんが、マー！ここは押さえて押さえて)

しかも見かけは立派でも、実現不可能なもののお警えとして「お経」が使われているのです。政策は現実に対応し、現状を是正するために立てられるものであり、実行されてナンボの世界。いくら立派な政策も実行されなければ、画に描いた餅、「机上の空論」にすぎないのは当然です。たとえ形容詞的に使ってもそのようなものと「お経」を同列に扱わないでいただきたい。

日頃何かと差別用語に敏感なマスコミも「お経」という言葉は何気なく使っているようです。ついでに言わせていただくとお題目においても然り。勿論本来の意味でなく前述のように使っています。

「お題目ばかり並べてもしようがない」

と言う風に一般に「お題目」という言葉も「実行できそもない項目」と

言う意味で使われています。

似たような使われ方に「ご託を並べる」という言い方が有ります。「ご託」とは「ご託宣」の略で、本来は神のお告げを指すのですが、俗化流用され「グダグダ文句を並べる」意に使われています。

「ご託」から「お題目」へ派生して使われるようになったのを知りませんが、いずれにしても仏教特に関成教団への不信感を背景に諷刺・諧謔の意が込められているでしょう。

ちなみに先ほどの読売新聞の記事の「お経」を「論語」や「聖書」「コーラ」に置き換えてみましょう。

「問題は、民主党がこの政策を単なる「論語」に終わらせずに、実現させることができるかどうかだ。」

「問題は、民主党がこの政策を単なる「聖書」に終わらせずに、実現させることができるかどうかだ。」

「問題は、民主党がこの政策を単なる「コーラン」に終わらせずに、実現させることができるかどうかだ。」

言いませんね。こんな言い方はありません。もしこんな事言ったら過激な原理主義者だったら脅迫の対象になるかも知れません。(チトオーバーかな)確かに「お経」や「お題目」という言葉を一般の人が軽視・揶揄するのモ僧侶や仏教側に反省すべき点は多々有ると思われませんが、それはそれとしてやはり仏教徒としては不快感を表明する必要を大いに感じます。

日常何気なく使われていくうちに人々の深層意識に蚕入し「お経」や「お題目」への冒涇の萌芽が芽生えるかも知れないからです。

もう一つついでに言わせていただくと「おしゃかになる」と言う言い方も常々困ったものだと思っています。この原稿を書きながら「広辞苑」で試しに引いてみました。

#### おしゃか【御釈迦】

(地藏や阿弥陀の像を鑄るのに誤って釈迦像を鑄てしまったことからという)つくりそこなうこと。つくりそこなうたもの。不良品。「―にする」「―にする」

作りそこなう意味とは知ってはいましたが、ナ、ナンとこんな由来の説があつたとは知りませんでした。シヨックです。地藏菩薩や阿弥陀仏の像を鑄るのに誤って釈迦像を鑄てしまったことを「つくりそこなう」と言うとは。なんたる釈尊軽視。いや釈尊蔑視。冒涇も甚だしい。少しムキになつて言わしてもらつと「何たる大謗法罪」。ほんとにそうなのかな。国語学界への浄土門の陰謀か、と勘ぐられずにいられません。

依然散歩の途中で立ち寄つた本屋の店頭で調べたことわざ辞典には確かこういう風に書いてあつたと思います。

やはり鑄物づくりで火加減を失敗し、鑄物が「おしゃかになった」のは「ひ(火)がつよ(強)かつた」からであり、「ひ」が「し」としか発音できない江戸っ子が「しがつよかつた」と言いそれが訛つて転化し、「しがつようか」↓「四月八日」↓「花祭り」↓「お釈迦(さま)」となつたという説でした。

この江戸っ子駄洒落説も首を傾げたくなるような眉唾物ですが、法華経信徒としては少なくとも前者よりはまだ可愛いげが有ると思われれます。何れにしても、死ねば皆ホトケであり「死」とは「生」の失敗、出来損ない、敗北、不浄なものであるという日本の風土に生まれたい方なのであります。

前述の不敬用語が死語になるなんて絶望的状况ですが、それでもやはり我々仏教徒のためめ努力によつて社会の信頼を取り戻すしかないのであります。

## 戒名料をめぐる

## 『受戒式』を見直そう

町 行象

先日、京都在住の先輩が上京してきたので久しぶりに待合い場所・上野駅の近くの居酒屋で「では一杯」ということになりました。十二・三人ほど座れるテーブルだったので隣のサラリーマン風の青年四人といつしか話すようになり、どういふ集まりか聞いたところ、釣り仲間とのことでした。最初は『放生会』や魚の話が話したりしていましたが盃が進むうちに話題が「戒名料」に及び、どうしても納得できないのことでした。

私自身酔っていたせいもあり、本

来の「戒名」の意味や寺と檀家の関係についていろいろ話したつもりでしたが、いまいち歯切れが悪ったようです。

以前読売新聞の「知りたい」コーナーにも「高額な戒名料の根拠がわからない」と云う記事が載っていたのも記憶しています。「戒名料」についてお寺さんと一般の人との間にはかなりのギャップがあるようです。寺檀関係がうまくいっている場合問題はないのですが、一部の「戒名料」を巡ってのトラブルは、一般の人の「戒名」への認識不足もさることながら、やはりその戒名の授受が行われるべき本来の「受戒式」そのものへの軽視に起因するものではないのかと日頃より考えていますのでその所感の一端を述べてみたいと思います。私自身は檀家もなく「戒名料」を頂く立場ではないので私なりに見聞きし、考えたことを書きま

す。「戒名」については複雑な要素が絡んでいきますので少し整理して考えてみましょう。

今更申すまでもありませんが一応（一）そもそも「戒名」とはどうい

うものなのか。本来の意義について。次に（二）檀家制度という現行の先祖の遺骨管理・祭祀執行システムの中で戒名料がどういう意味を持つのか。そして（三）理想的な戒名の受けかた並びにその御礼としての布施とは。

## 戒名について

さて先ず（一）ですが、戒名とは一般の人は死者に与えられる「死後の名前」と思っているようですが本来は「受戒者の名前」のことです。自ら信じる本尊の前で師匠（戒師）から授かる名前のことです。教えや人格をとおしてめぐり合った宗教に帰依しその教え（戒）を終生いや死後も守り続けると誓った上で頂く名前なのです。その為の儀式を受戒式といい僧侶の場合は得度式と云います。昨日までの自分と決別し今日から新しく生まれ変わるための儀式です。宗教において回心なくして入信はないのです。生まれながらにして所属している宗教は厳密に云うと習俗であつて宗教ではありません。た

とえ小さいときから慣れ親しんでいる宗教儀礼であつてもそれは風習であつて宗教ではありません。勿論宗教の中に「習俗」「風習」の部分のあることを否定しませんが、本来宗教とは「決定的自覚」があつて成り立つものだからです。ですから信仰とはただ何となく宗教的雰囲気であつたものでなく、又戒名とはいつの間にか付いているものでなく、絶対的に信じられる本尊と授けてくれる戒師への信賴關係、そして何よりも自己の絶対的なる信仰の表明が前提となるべきものなのです。

その守るべき「戒」の解釈が宗派によつて違います。私達日蓮門下にとつては御題目（法華經）を

『今身より佛身に至るまで能く持ちたてまつる』

ということが「戒」であることは今更申すまでもないでしょう。戒名とはその「戒」を守ると誓つた上で頂く仏弟子としての登録名なのです。ですからその名前を頂いたときの感激を忘れず、その名前に恥じないように精進すべきいわば目標となるべきものなのです。生前の人柄や功績を反映顕彰する「おくりな」とは全く性格を異にします。本来は生きていくうちに授かるものですが、現在

ではほとんどの人が死んでからと云うことになつて葬式が受戒式も兼ねているのです。そこから様々な問題が派生してくるのです。

普通戒名というところ 院

信士（信女）或いは居士（大姉）の九文字全部を戒名と思いがちですが、厳密に言うところの二字の部分だけを言います。九文字全体は日蓮宗では「法号」といつて、院と

院号と という道号とそして

という戒名と信士（信女）或いは居士（大姉）という位号から成り立っています。広義に「法号」を「戒名」と一般に呼び慣わされているようです。念のため。

#### 戒名料について

次に歴史的・制度的な事情をからめて（二）の檀家制度という現行の先祖の遺骨管理・祭祀執行システムの中で戒名料がどういう意味を持つのか。ということについて考えてみましょう。

最初に戒名の命名授与権は現行の檀家制度の下では先祖代々若しくは自分が檀家になつたお寺の住職が占有していることを確認しておきまします。最終的に納骨するお寺の住職さ

んしか付けられないのです。そのようなお寺がなくなればゆる分家の人や寺に属さない霊園墓地の人は別ですが。

さて先ず「戒名料」という言葉ですが、「料」が付くからには「戒名」の「料金」のことでしょうが、果たしていつ頃から使われたのでしょうか。おそらく「物」並に代価として金銭を受け取る必要性から生じてきたものなのでしょう。

そもそも寺とは檀家という経済的基盤の上に成り立っています。檀家の自発的「布施」という行為で護持されてきたはずで

もともと寺と檀家は三つの「縁」で密接に結ばれた關係でした。いわゆる「地縁」「血縁」「法縁」です。

仏教の教えを介して同じ地域の中で檀家一族を祀り、葬儀・年回法事・春秋彼岸会・お盆等の供養を通して地域や一族の繁栄を願う共同体でした。地域社会において「伽藍」と「墓」というハード面と「法」というソフト面がうまく機能していたのです。

それが戦災や都市化によつて距離的に離れ、又核家族化することによつてお年寄りからの伝承を聞く機会がなくなり、お寺と檀家が疎遠にな

ったケースが戦後多くなつたようです。

又先祖代々の家の宗旨に自己の魂の救いを求めず、他の宗教を信仰するようになつた人々もいます。そのような人の中には「葬式は自分の宗教」で「お骨は先祖代々の寺で」という虫の良い考えの人もあるようです。単なる遺骨管理だけ任されるんじゃないとお寺さんもたまつたものではありません。

大体そのような人は檀家として最低限の義務を果たせば事足りると思つているようです。両彼岸・お盆のお墓参り、護持会費は納めますが、本堂や書院・記念事業の寄付はチョット御勘弁という人も多いようです。

又日頃お寺からの案内には、なしのつぶてで突然現れて親の葬式をお願いする人もいます。お寺さんとしては一言も二言も云いたくないでしょう。お寺に貢献せずしかも不信心な人にお寺としてもいい戒名を付けられるはずありません。しかし遺族の社会的体面上いい戒名をということになり、「交渉」がはじまるのです。そこでお寺さんも閻魔帳ならぬ護持会費の帳簿や寄付の記録帳を持ち出して日頃の檀家として

の義務不履行を理由になにがしかの金額を要求し、かくして「戒名料」という名目で檀家からお寺へ支払われるのです。(勿論死者に替わつて功德を積むという側面もあります。) 当然戒名料を世間並みに即物的に判断する目安として、院号や道号・位号を含めたランク付けの元で行われるのです。本来戒名は前述のように二字なのですが、「一字では「料金」も取りようがありません。ですから院号があつて長くて居士号が大姉号であれば立派な戒名となつてしまうのです。ひとつひとつの漢字の意味よりそつちの方が優先されるのです。かくして「戒名料」が一人歩きし、「戒名」とはお金で買うものという風潮を生み、何とかして「葬儀」の手数料を多くせしめようとすると輩の格好の名目になつていっているのです。

### 『血脈授戒会』について

「戒名」について考えるとき私にとつてどうしても忘れられない行事があります。それは平成七年の夏に行われた青森の三浦上人のお寺「弘法寺」での『血脈授戒会』です。十年に一度の法要で檀家さんが五日間に亘り、ひたすら礼拝を行じる礼拝

行・法華經お題目の誦誦唱題行・法話を聞く聴聞行に専念し仏弟子としての自覚を得る為の修行を行うのです。出仕するお坊さんも延べ八十人を越える大法要でした。久遠の本仏お釈迦さまから上行菩薩の日蓮大聖人そして私達とお題目によつてつながる『血脈』に生きる絆を深め、日々の暮らしの中で法華經の教えを生かすための修行を行うのです。そして五日目の結願の日に、お題目を今身より佛身に至るまで能く持ちたてまつる」という「本門戒」を受け、その人にふさわしい戒名を住職の三浦上人御染筆のお漫茶羅と俱に授かるのです。当然亡くなられた檀家さんはその戒名で改めて引導を受け霊山浄土に旅立つのです。五日間に亘る法要の内容もすばらしく、教わる事が沢山あり深く感銘を受けました。修行をして生前のうちに戒名をいただくという理想的な寺と檀家の在り方だと思えます。元は他宗で行われていたのを日蓮宗で取り入れたようですが、地方へこいつたら失礼ですが、こいつうすばらしい法要があることをみんなで見直さなければならぬと改めて思います。

『血脈授戒会』だけでなく各地方には昔から行われてきた本来の形を

大事にした様々な儀式や伝承風習があるとあります。勿論その地方に根ざした伝統をそっくりそのまま余所の土地に移植は出来るはずはありませんが学ぶべきところは学んで積極的に取り入れるべきだと思います。

日蓮宗の場合、情報発信が中央偏重であり、忙しさにこつつけて何でも簡略化しがちな都市中心になってしまい、又行政面での宗務院主導型の弊害があるようです。

さて本来の戒名の意味を改めて述べてみましたが、実際問題として戒名の元になっている「信仰」という目に見えない部分と「戒名料」という即物的な問題は個々のお寺さんと檀家との間に複雑な問題が絡んでいるので「かくあるべきとは」言い難いものがあります。あくまでもお寺と檀家との信頼関係が前提であって、「安けりや良い」「高けりや良い」逆に「高けりや悪い」の問題ではないはず。「市場原理」が本来働かない領域なのです。サービス業と割り切って日蓮宗統一価格を公示できるようにしなければ別ですが。勿論そんなことは出来るはずがありません。あくまでも布施の一環として頂くものであり、「お布施」としてお納めするものではないでしょう

か。問題は信頼関係が崩れたとき、又「葬儀屋」さんからの紹介などで信頼関係が成り立ってないところから「交渉」が始まる場合です。

#### 「受戒会」について

最後に戒名の授受が行われる「受戒会」についても一度考えてみましょう。どうもこの受戒会の無関心・軽視が今日の様々な問題を生みだしているように私には思われてならないのです。信仰の出発点がうやむやなので、信仰してるつもりが単なる習俗の踏襲や旅行気分の霊跡参拜であつたり、信行会がサロン風な付き合いの場であつたりするのではないでしょうか。

戒を受けるとは死と言う今生の終着駅で受けるものでなく、私達の信仰の出発点であるべきなのです。どのどなた様から与えられたお題目なのか解らずにただ漠然と唱えるのではなく、久遠の本仏お釈迦さまから親しくお題目を譲られたという感激を持ち、唱えるのです。「受戒会」においてはその感激が父なるお釈迦様と同じ仏様になるまでお題目を持ち続けるという「一大決心」を生み「一大決心」から「戒体」と言う「戒」

を持ち続ける一種のエネルギーが生まれ、その人の身心の一部となるのです。

その「戒体」はその人が死んでも無くなるものではありません。私達が日頃読み慣わしている「開経偈」の末尾の（法華経に）「生々世々値遇し頂戴せん」の誓願に呼応するのです。「受戒会」とはその「戒体」発得の儀式とも言えましょう。

そしてまことの「仏の子」としての自覚が同時に「仏の使い」としての自覚を生み「広宣流布」の使命感に身を奮い立たせるのです。「仏子」が「仏使」として同時に蘇るのです。久遠の本仏お釈迦さまから法華経（お題目）を広める役目を仰せつかることを「付属」と言いますが、この「付属」無くして我々の信仰は成り立たず、又この「付属」無くして「受戒会」も成り立ちません。

因みにこの「本門戒」の授受が行われるところを「戒壇」というのです。久遠の本仏お釈迦さまとの間に入つて「戒」を授ける師を「戒師」といい、この「戒師」との巡り合いが大事なのです。もう一度私たちは「受戒」と言うことについて真剣に考えなければならぬのではないのでしょうか。

## 大マンダラのマルチメディア性

町 行象

紙から音や動画が飛び出すと言う画期的な試みが読売新聞で行われている。勿論音や動画が飛び出すと言ってもそのまま聞こえたり見えたりするはずはない。その元となる電子情報がゴマ塩模様の図柄として新聞紙に印刷されていて、それをスキャナーで読みとり、専用の解読ソフトで再生するのである。早速私も試してみた。読み取るときは明るさの設定で手間取ったが、「アラ不思議」軍隊行進曲がパソコンのスピーカーから流れてきた。

ゴマ塩模様の図柄を「インタクタコード」と言い、イスラエルで開発された技術だという。手紙でもやり取りできる紙の至便性と暗号の必要性から生まれたものなのだろうか。

インタクタコードは情報をデジタル化し、二進法による黒と白の点で表示した一種の暗号だ。ゴマ塩模様で連想したついでに頭髪に譬えてみよう。

フサフサとした黒髪はスキャナーで

読み取ると真っ黒になり中身はともかくとして情報量はゼロ。

又筆者のようなスキンヘッドも真っ白で同じくゼロ。

「ダイタイヤナー」のテレビでお馴染みの評論家のようなバーコード型は髪が一方向（一次元）に黒と白がはつきりしているので、情報量は少ないがデータをインプットできる。事実スーパーなどのレジで見かけ、食品や様々な商品の価格などの商品情報が書かれていて、在庫や売上管理に利用されている。しかし太さの違う線が一方向のため盛り込める情報が限られている。

その点ゴマ塩頭ならぬ「ゴマ塩模様（インタクタコード）」の場合は点のパターンの細かさを変えることによって新聞紙の場合、一平方センチにアルファベットや数字で約100文字ものデータを記録できるという。

従来紙という媒体は文字や画を書き表すだけだったが新しい技術によって音や動画も情報源として扱えるように

なり、いわゆるマルチメディアとして新しい機能を付加されたわけである。

まさしく世はデジタル時代。あらゆる分野にパソコンやインターネットが普及し、現在ＩＴ（情報技術）革命は物凄い勢いで進行中である。

新しい技術や新しい時代は又新しい視点や考え方を提供してくれるものである。伝統的思考法にとっては自明のことが時代の光を当てることによってより一層鮮明になることもある。

我々いわゆる伝統宗教を信ずるものにとつては何時の時代もその時代のニーズに心えられるか大きな課題である。硬直した教団組織運営や年月による固定化・形骸化は常につきまとうている。

本来大マンガラとはただありがたく拝まれるだけの対象として、拝む人と隔たつて存在しているわけではない。久遠の本仏お釈迦さまの修行と悟りの功德であるお題目を唱えることによつて参入する世界を書き表したものであ

り、唱えた人を含めて縦横無尽に拡がっていく仏界の壮大なエネルギーで充滿している。

さてそろそろ「大マンガラ」を「大漫茶羅」と表記したい。ついでにこだわりたひのはあくまでも日蓮聖人の文字漫茶羅の独自性あらわすため「大曼陀羅」でなく「大漫茶羅」にしたい。

「大漫茶羅」とは仏教史上最高のクライマックス。法華経本門八品虚空会上を舞台上に繰り広げられた大ドラマを元にタテヨコ二次元の紙幅に日蓮聖人が「たましひ（魂）をすみ（墨）にそめながして」書かれたものである。その「大漫茶羅」の立体的説明はコンピュータ用語を使った方が現代人には分かりやすいのではないかと思う。しかし「大漫茶羅」に関しては古来からその解釈をめぐる様々に論議され、宗教の根幹問題の「本尊論」とリンクされているため慎重を期して論じなければならぬ。筆者の浅学浅信による不敬の謗りもあるかも知れないがまず

は大目に見てもらいたい。

新聞に印刷された「インタクタコード」さえも字だけでなく音や画像・動画がインプットされているのである。ましてや日蓮聖人が「たましひ（魂）をすみ（墨）にそめながして」書かれた大漫茶羅である。そこには釈尊の「梵音声」をはじめ法華経に登場する諸菩薩神々仏弟子、様々な人々の声やその姿が画像としてあったり、又過去の佛から釈尊の四十余年の説法の歴史が凝縮して動画として込められていると仮定してもおかしくはないと思う。

前置きが長くなつたが、それでは「大漫茶羅コード」を説明してみよう。

まず作業に入る前に確認しておきたいが、コンピュータの様々な機能を統括するオペレーティングシステム（OS）はウインドウズ98を使うことにしよう。常々コンピュータソフトウェア業界のマイクrosoft帝国の独り勝ちを苦々しく思つていて、本当は梵字を含めて世

界の文字13万字を扱える純国産OS「超漢字」を使いたいのだが、導入してまだ日が浅く、ドロー音声ファイルが使えないらしいので今回は諦める事にした。悔しいけれど他のソフトとの様々な機能の互換性を考えても現時点ではウインドウズ98を使うしかしょうがないのだらう。

さて先ずはスキヤナーで「大マンダラ」をコンピュータ画面に取り入れてみよう。一応宗門のスタンダード「臨滅度時」のお漫茶羅の複製を使うことにした。タテヨコの比率は悪いがうまく収まったようだ。さて次に適当なところでマウスをクリック。

オッ！と突然画面がフリーズ。やはり新しい試みには障害はつきものらしい。ここでめげて引き下がるわけには行かない。リセットをかけてもう一度立ち上げてみよう。忍耐のいる作業になりそうだ。

ナニ！今度はパスワードの要求か。とりあえず半角小文字で「junonokaze」

と入れてみる。うまくいったようだ。思わず画面にむかつて合掌……。

コンピュータ画面だと自由に見たいところを拡大できて便利だ。最近とみに老化した筆者の眼にはありがたい。

画面下のステータスバーを見ると右の方から地獄界・餓鬼界・畜生界・阿修羅界・人間界・天上界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界と十の世界が並んでいる。現在は仏界がアクティブになっている状態なのだ。他の九界は仏界の後ろに重層しているということか。「なるほど」十界の一つ一つが「ウインドウ」になっていて、それが重なり合って「ウインドウズ」。

一つ一つの「ウインドウ」に他の九つの「ウインドウ」が有り、10×10で100。百界だ。教学要語で十界互俱というやつだ。ついでに方便品の十如是をかけて百界千如。それが「国土世間」「衆生世間」「五蘊世間」にわたるので3をかけて3000。それが

私たちの一念に具わっているというの一念三千。教学上の定番である。

それを人間界をクリックしていいのか。それとも仏界をクリックしていいのかが「理」と「事」の違いということなのだらう。

例しに菩薩界をクリックしてみよう。瞬時に地涌の菩薩をはじめ迹化の菩薩が出てきた。物凄い数だ。法華経では六万恒河沙（ガンジス川の砂×60,000）と形容される無量の数だ。本門の教主釈尊と多宝如来の鎮座まします多宝塔を囲んでそれぞれ礼拝合掌している。テキストファイルがあるのでクリックしてみよう。出てきた。

日蓮聖人の「観心本尊抄」の一節『釈尊の脇士は上行等の四菩薩。文殊、弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は、万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如し。』

今度は動画ファイルをクリックする

# 放生会のドジョウに想う

鷲峰会 松戸道場

## 町 行象

昔から夏バテ防止のスタミナ源と言えばうなぎと共にドジョウがある。浅い土なべにササガキゴボウを敷き、その上にドジョウを並べ、しょうゆ・酒・砂糖などを合わせた割下で煮込んで卵とじにする。開いて頭や骨をとった「柳川鍋」と丸ごとの「ドジョウ鍋」があり、人によっては小骨のザラザラ感を嫌がり「柳川鍋」を好むが、筆者はやはり丸ごとの「ドジョウ鍋」が好い。「柳川」だとドジョウの風味(?)が抜けてて何かもの足りないのである。まるごと熱いところフーフーしながら冷たいビールで胃袋に流し込む。夏バテ防止の定番メニューである。こう書いてただけで思わず生唾ゴックンである。その好物の「ドジョウ鍋」を食べなくなつて何年になるのだろう。

筆者の道場(鷲峰会 松戸道場)では毎月十五日をお釈迦さま御在世当時の「布薩会」にならつて「懺悔の日」としている。

「布薩会」とは半月に一度、仏弟子達が集まつて半月間の修行生活を戒律に照らし、守つたか、背いたか懺悔し合う集まりでお釈迦さまみずから行つたと言われている。当道場では一応大乘仏教徒ということで、照らし合うべき「戒律」もないのでその代わり様々な懺悔を行つており、年に一度は「放生会」を行い、懺悔の一環にあてている。

「放生会」とは正式には「放生慈濟会」といい、「人によつて捕らえられた生き物(鳥や魚)に法を説き仏教の縁を結ばしめ、野山や河・湖沼に放生会のこと」で今日では毎年八月十五日の京都の石清水八幡宮の放生会が有名である。又一部の業者が扱う魚やウナギなどの食材への感謝と罪滅ぼしのため行われているようだ。

古い施餓鬼本を見ると放生会の法要式も併載されており昔は「施餓鬼会」と「放生会」はセットで営まれていたのだろう。生きとし生けるものすべて

を慈しむ仏教の慈悲の心をはくむ大事な法要であったのだろうが、食生活の欧米化や忙しい現代人のライフスタイルに合わせた仏教行事の簡略化によって今では一般寺院ではほとんど行われなくなっている。

その由来は『金光明最勝王経』の「長者子流水品 第二十五」に拠る。

お釈迦さまの過去世物語。流水長者が水が涸れて死にかけたの無数の魚類に水を運んで食物を与え、説法をして助けたところ、魚は死後三十三天に転生して流水に恩返ししたという。

『金光明最勝王経』は日蓮聖人が「立正安国論」でも引用されているように奈良時代より護国の經典として知られているが、壬生台舜氏（大蔵出版仏典講座『金光明経』解題）によると中核になっっているのは「懺悔」だという。

さてそこでイザ放生会を行うに当たって何を放生するか考えたところ。鳥だとなまじ野山に放たれると却って他

の猛禽類に食われたり、この御時世生息可能な環境とは言い難く、人間によって籠の中で飼われた方が鳥にとつてはよいかもれない、ということでは断念。その点、魚なら近くに江戸川もあるし好都合である。最初の頃はなるべく多くの種類がよいだろうと言うことで、キンギョ・コイの稚魚・タナゴ・ドジョウ・フナ・メダカにした。聞くところによるとキンギョやコイの稚魚などカラフルなのは目立って他の魚や鳥たちの標的になりやすく結局ドジョウが一番好いようである。そのドジョウに放生会を通していろいろ考えさせられたのである。

魚屋さんの生け簀のドジョウを全部というわけにいかないで網で掬ってもらって買ってくるわけであるが、同じ生け簀のドジョウでもここが大きな運命の分かれ道なのだ。網に掬われなかったドジョウは心ない（？）後の客によっておおかた生きながらにして熱

湯にプチ込まれ、ドジョウ汁やドジョウ鍋にされ夏のスタミナ食として胃袋を満たすのである。網に掬われたドジョウは特設の水槽に入れられ、ありがたなお経を聞かされ、餌を与えられそして広い広い川に放されるのである。

しかし中にはそれまでもたず、白い腹をプカプカと浮かべ放生会のお経がはかなくも葬式のお経となってしまうドジョウもいる。又網で掬われる際も網の真ん中で難無く掬われるのと網のワツカ附近で辛うじて網の中へ入り込むドジョウもいる。その差はいったい何なのだろう。やはり同じドジョウでも宿世の因縁が違うということだろうか。

考えてみれば自分もお釈迦さまの持つ法華経という網で掬われた人間だ。それもワツカの上で辛うじて網の中へ。ドジョウ君達と我が人生を重ね合わせるにあのドジョウ髭が可愛らしく思えるのである。そんなドジョウをまだ当分食べそうにない。



## 『超漢字』でデータベースを

鷲峰会 松戸道場  
町 行象

今回は『超漢字』というパソコンの基本ソフトを紹介したい。

インターネットの利点としてまず挙げられるのは検索機能であろう。試みに「多宝如来」をキーワードで検索エンジンにかけてみる。

検索結果として25,666件のうちまず10件が表示された。

釈迦・多宝如来並坐像・・・

☛【追放】親が子を追放する。『アイヴァンホー』（スコット）・・・

下山正恕氏は顕正会員だ・・・

法華経（ムー大陸の聖なる蓮の花の教え、聖なる靈感の書、・・・

阿弥陀如来 金蔵寺の・・・

妙法蓮華経分別功德品第十七

（以下略）

とりあえず をクリックすると案の定、釈迦・多宝如来並坐像の画像と仏像の説明お寺の交通案内図が出てきた。

？多宝如来とどう関係があるのか。

と興味はあるが今回はパス。

分別功德品でなくどうせなら「見宝塔品」ぐらいが出て欲しかった。

今度は検索エンジンを「Infoseek」に変えて同じ「多宝如来」で引いてみる。

「見宝塔品」のみならず、妙法蓮華経並開結。はたまた御遺文までのご登場である。「文字マンガラ画像解釈学の一試論―四天王の方位が示す一つの立体意味―」という興味あるタイトルの小論文にも出会った。後日じっくり読むことにする。

このように一つのキーワードから芋づる式に知りたい情報から別にそうでもない情報、思いがけない情報まで居ながらにしてパソコンの窓口から入ってくるのである。便利なものだ。

今年「ブロードバンド元年」と呼ばれ、今は都市部だけであるが、光ファイバーはじめ高速電話線のADSLやケーブルTVなどを利用して大容量の情報が瞬時に我々の手許に送られて来るようになる。ネット環境は益々充

実して来る。一車線の道を時速30キロでノロノロ走っていたのが10車線で時速100キロぐらいで走れる道路のように情報のスーパーハイウェイを日本中に張り巡らそうというのである。

しかしネットサーフィンと称してただ情報の波を漂って楽しんでいるうちはいい。膨大な情報を前に自分にとって本当に必要で、生かせる情報なのか、と考えると情報の選別という能力が更に必要になり、時間と労力がそれに消費されるとは皮肉なものである。同じキーワードで検索しても検索エンジンによって違ってくるのは上述の通りである。膨大な情報の海から「キーワード」を釣り針に「検索エンジン」を釣り竿にして釣るようなものであり、釣り針の設定と釣り竿の選択如何によって違う情報が釣れて来る。

インターネットというデジタル縁起の世界は所詮人間が情報を発信している以上ミソクソ一緒、玉石混淆、本物

偽物の跳梁跋扈している世界である。おのずから情報の量より情報の質が問題になってくる。高度情報通信時代を迎えサイバー空間を布教の場として捉え、デジタルツールを布教の道具として考えるならば、我々にとって「聖なる情報」をいかに社会に提供できるか大事なことであろう。

そのためにはまず基礎情報「法華経・御遺文」という聖なる情報とその解説・注釈・解釈の第一級の情報の確保が必要なのは言うまでもない。しかし寂しいかな宗門御遺文スタンダード『昭和定本』さえも未だテキスト化されていないのである。平成十四年立教開宗七百五十年を控え、我が宗門は高度情報通信時代に対応するためどれぐらいの対策を講じているのであろう。

話がわき道にそれてしまったが、さて娑婆の情報集めはインターネットに譲るとして、法華経や日蓮聖人に関する人がインターネットのように一

つのキーワードから次から次へ知りた  
い情報にアクセス出来るデータベースが出来ないものかとパソコンをいじりはじめたときから漠然と思っていた。いわゆるハイパーリンクテキストである。じゃあ、まるごとインターネットのホームページ形式で作ればよいじゃないかと思うかも知れないが、ソフト自体が重すぎ、一般ユーザーにはいろいろ手続きが面倒すぎる。電子辞書にしても然り。もっと簡単にハイパーリンクテキストが出来るものはないのか。お互いが情報を持ち寄り自由に追加補正が出来るような。

それに打ってつけのソフトが冒頭の『超漢字』なのである。『超漢字』は現在バージョンアップして『超漢字3』が発売されているが、ウィンドウズと同じようにDOS/V機で動く基本ソフトで、ウィンドウズに先駆けて開発された純国産のOSなのである。文章や図形の作成編集はもちろんのこと表

計算・データベース・メール・インターネットはたまたウインドウズファイアとの変換ユーティリティや書庫管理・文章検索・画像アルバムという小物に至るまでんこ盛りのソフトなのである。それがわずか1万数千円で手にはいる。しかもナント17万字という世界中の文字が搭載されている。梵字は勿論大漢和辞典も収録されていて法華経・御遺文で悩まされる外字作成からも解放されるのだ。

いまやパソコンのCPUは高速化し、ハードディスクは大容量化し、扱うソフトも肥大化の一途をたどっている。パソコン自体がヒートアップし重くなり過ぎてきている。厚化粧でブランド品で着飾った、金ばかりかかる女のようになら投資しただけ愛着が増す仕組みになつてきている。その点「超漢字」は良い。一昔前のパソコンで充分働いてくれる。シンプルで爽やかで最初は何となくもの足りないが、つきあえばつきあうほ

どなじんでくる味わい深いソフトなのだ。決して派手でなく小回りは利くし、

ある。

ふてくされてストライキも起こさずせつせと働いてくれる。そして数ある特徴の中で特筆すべきは、扱うソフトの拡張子がすべてTADと統一されていることである。これはどういうことか

因みに筆者が目下作成中の日蓮聖人年譜（聖寿50歳のところ）で説明してみよう。

という文章・図形・表計算・画像がすべてどのソフトでも扱え、適当なファイルをマウスで掴んでポイと放すとそこへ張り付けることが出来るのである。一つのファイルを「実身（じつしん）」といい、その「実身」を指すラベルのようなものを「仮身（かしん）」という。その「仮身」を何処にでも幾つでも張り付けることが出来るのである。その「仮身」をクリックすること

年表資料としては日蓮宗発行影山堯雄編『日蓮宗年表』と河出書房新社刊日本歴史大辞典別巻『日本歴史年表』を用いた。

によって自由にその「実身」に飛んでいける。この「実身」と「仮身」のネットワークを構築することによって文章・図形・表計算・画像が混在するハイパーリンクテキストが出来るわけ

西暦一二七一 文永八年 聖寿50歳  
（紙面の都合上 前略）

その「実身」に飛んでいける。この「実身」と「仮身」のネットワークを構築することによって文章・図形・表計算・画像が混在するハイパーリンクテキストが出来るわけ

九・一二 龍口法難（定503・定963・年譜・図譜・鎌志）

ラベルのようなものを「仮身（かしん）」という。その「仮身」を何処にでも幾つでも張り付けることが出来るのである。その「仮身」をクリックすること

九・一三 宗祖、依智護送（定1238）

つでも張り付けることが出来るのである。その「仮身」をクリックすること

九・一四 平左衛門頼綱、書を印東二郎

による。その「実身」に飛んでいける。この「実身」と「仮身」のネットワークを構築することによって文章・図形・表計算・画像が混在するハイパーリンクテキストが出来るわけ

兵衛尉に与う（奥書）

によって自由にその「実身」に飛んでいける。この「実身」と「仮身」のネットワークを構築することによって文章・図形・表計算・画像が混在するハイパーリンクテキストが出来るわけ

十・三 書を土木入道に報ず（定503）  
（紙面の都合上 中略）

によって自由にその「実身」に飛んでいける。この「実身」と「仮身」のネットワークを構築することによって文章・図形・表計算・画像が混在するハイパーリンクテキストが出来るわけ

十・九 相州本間依智郷において御本尊（通称・楊子御本尊、現京都市立本寺蔵）

を認む(本尊録)

此の文章の(定 )の所にそれ  
ぞれの御遺文の「仮身」を張り付ける。  
十・九の「御本尊(通称・楊子御本尊、  
現京都市立本寺蔵)を認む」の所にはあ  
らかじめスキャンしておいた楊子御本  
尊の画像ファイルの「仮身」を張り付  
ける。そしてその画像ファイルに中尾  
堯先生の解説文を埋め込んでおく。と  
いうふうには法華経・御遺文その解説か  
ら日蓮聖人だけでなく門下・壇越・信  
徒の事績まですべて網羅出来るのであ  
る。「仮身」をクリックすれば瞬時に  
そのファイルが現れ、興味有るところ  
は更に深く、飛ばしたいところはその  
まま進む、指一つの操作でそれが可能  
なのだ。

何故こんなに素晴らしい「超漢字」  
がマイノリティーに甘んじなければな  
らないのか不思議に思われるだろう。  
それにはきわめて政治的思わくが働い

たからだ。「超漢字」を開発した東京  
大学教授坂村健氏が日本国内の小・中  
・高校全部に「超漢字」搭載のコンピ  
ューター採用を提唱し文部省も導入を  
決定したのであるが、アメリカから横  
やりが入ってダメになったのである。  
スーパ一三〇一条を振りかざして、「貿  
易障害だ」というクレームが付いたの  
である。

「日本は国内市場を閉鎖し、不公正  
に国内産業を育成している。そのため、  
マイクロソフトなどアメリカのOS産  
業が、日本の市場で公正な競争が出来  
なくなっている。」こうした言いがか  
りとも思える圧力を日本政府にかけて  
きてその結果、採用中止になったので  
ある。逆にそれぐらい「超漢字」はス  
ゴク、チョーイケテルOSなのだ。自  
国の標準をグローバルスタンダードに  
と、目論むアメリカにとってまさに脅  
威なのだ。

しかし欠点が無いわけではない。少

数派の悲しさ、いわゆる「拡張性」が  
不十分でプリンター等の周辺機器が限  
定される。「超漢字3」になって一部  
USBに対応してきたが、SCSI接  
続は出来ない。しょうがないから目下  
筆者は「ウインドウズ」と「超漢字」  
を同居させ先ず「ウインドウズ」のS  
CSI接続のスキャナーで様々な資料  
をOCRにかけテキストファイル化し、  
ファイル変換によって「超漢字」で用  
いる方法を探っている。しかしそれも  
ユーザーが増えることと技術改良によ  
ってやがて解決する問題であろう。

以上筆者の拙い説明で納得されたか  
甚だ心もとないが、ともかく「超漢字」  
は発想や機能において未来を先取りし  
ているOSなのである。大手メーカー  
から提供される情報や機器だけに目移  
りし振り回されるだけでなく、そろそ  
ろ我々一般ユーザーも様々なソフトを  
を選択し「パソコン文化」を育ててい  
く姿勢が望まれるのではないか。